サリドマイド事件

ホワニシャン・アストギク

はじめに

1957 年にドイツのグリュネンタール社によってサリドマイドが開発され、サリドマイド系睡眠薬が世界 40 カ国以上で販売されていた。「安全な睡眠薬」として宣伝されていたこの薬の影響で、1950 年代の終わりから 1962 年にかけて、世界では一万人程度の四肢・聴覚などに障害がある子どもが生まれ、これは「サリドマイド事件」として知られるようになった。

本報告は、「世界的な恐怖」と呼ばれていたサリドマイド事件についてである。ただし、事件の詳細、サリドマイド裁判などについてはすでに十分研究があるため [1]、ここでは今まであまり検討されてこなかったトピックに焦点を当てる。サリドマイド事件をとりまくどのような言説があったのか。メディアなどはこの事件をどのように捉え、報道し、サリドマイド児についてどのように語っていたのか。また、サリドマイド児の親が自らの「悲劇」をどのように捉え、どのような行動をとったのか。本報告では上記の問題に焦点を当てる。結論からいうと、メディアはサリドマイド事件をセンセーショナルにとりあげ、障害児の存在自体を否定する表現もしていたが、他方でサリドマイド児を含む障害児を可視化し、サリドマイド児のポジティブなイメージ（場合によっては「感動」あるいは「美談」まで至った）を形成していた。サリドマイド児の親は、「奇形」のある子どもの誕生を「悲劇」として捉え、自分の子ども「不幸」とみなしていたが、同時にサリドマイドという薬に（スティグマから脱出する）救いを求めていたと言えよう。

サリドマイド事件とその社会的影響

1958 年 1 月に大日本製薬株式会社は「イソミン」という睡眠薬を発売した。イソミンは「副作用のない」「安全」な薬として宣伝されており、その広告は多くの新聞に現れていた。広告には笑顔で眠っている女性の顔が写り、次のようなフレーズが使われていた。

---

[1] サリドマイド事件の詳細やサリドマイド訴訟などについては、平沢（平沢正夫『あざらしっ子』三一書房、1965）、増山（増山元三郎編『サリドマイド：科学者の証言』東京大学出版会、1971）、藤木・木田（藤木英雄・木田盈四郎編『薬品公害と裁判：サリドマイド事件の記録から』東京大学出版会、1974）、全国サリドマイド訴訟統一原告団・サリドマイド訴訟弁護団編（全国サリドマイド訴訟統一原告団・サリドマイド訴訟弁護団編『サリドマイド 裁判』（第一編～第四編）サリドマイド裁判記録刊行委員会 総合図書、1976）、高野（高野哲夫『戦後薬害問題の研究』文理閣、1981）、川俣（川俣修壽『サリドマイド事件全史』緑風出版、2010）、山本（山本明正『サリドマイド事件（第 4 版）』Akimasa Net、2020）の研究がある。しかし、これらの研究は主として事件の詳細に焦点を当て、その社会的影響、事件をとりまく言説などについてほとんど触れていない。事件の社会への影響について簡潔に触れているのは川俣のみである（442～447 ページ）。

習慣性のない新しい催眠剤
① 副作用の心配がなく、翌朝の目ざめがさわやかです。
② 習慣性を伴わず、どなたでも安心してお使いになれます。
③ 劇薬とちがい安全なお薬ですから薬局で自由にお求めになれます。
④ 不安、緊張、興奮状態の鎮静剤としてもすぐれた効果があります。
ねつきが早く…
ねむりが深く…
目ざめさわやか…[2]

イソミンは価格も手頃であり（12 錠　150 円・30 錠　300 円）、多くの人に愛用されていた。のちにサリドマイド裁判の原告になった鳩飼きよ子は 20 代のはじめに結核の治療をきっかけに不眠症になり、睡眠薬を常用していたが、その中でも特にイソミンは彼女の「愛用の薬」であった[3]。のちにサリドマイド児親の団体の代表者になる飯田進の妻、舞踊家の甲斐ひかり（芸名）も、不規則なスケジュールのためイソミンを多用していた[4]。中森黎悟もイソミンの愛用者であり、それを時折妻登志子にも勧めていた（「こらええ薬や」）[5]。

1960 年 8 月に大日本製薬は胃腸薬の「プロバン M」を発売した。プロバン M は「神経・感情を使う人の胃の薬」として宣伝され、つわり止めの薬としても使用されていた。正木登喜子がそれを服用し、のちに自分を責めていた。「私が悪かったのよ。お母さんが悪かったの。あのつわりさえがまんしたら、あなたに、こんな負い目はおわせなくてすんだのにね、こめんなさい」[6]。

しかし、安全なはずであった両薬にはサリドマイドが含まれており、妊娠初期にそれを服用した数多くの女性には四肢、聴覚などの障害をもっている子どもが生まれた。サリドマイドは 1957 年に西ドイツのグリュネンタール社によって開発されたものであり、世界 40 か国以上で販売されていた。一方、1950 年代おわりに、重症奇形を持つ子供が生まれるようになり、その調査を進めていた小児科医のヴィドゥキント・レンツ（1919〜1995）は、1961 年 11 月にサリドマイドと奇形の関係を示唆する研究報告を行い、グリュネンタール社がサリドマイド剤コンテルガンの回収を発表した。同年 12 月にグリュネンタールが大日本製薬にレンツ報告について連絡した。しかし、大日本製薬が広告を停止したが、薬を回収しなかった[7]。大日本製薬が販売を停止したのはそのおよそ 10 ヶ月後、1962 年 8 月であり、そのきっかけは読売新聞のスクープ「日本にも

---

[2] 読売新聞、1958 年 1 月 22 日
[3] 鳩飼きい子『不思議の薬：サリドマイドの話』潮出版社、2001：18〜19 ページ。
[4] 飯田進『青い鳥はいなかった：薬害をめぐる一人の親のモノローグ』不二出版、2003：36〜37 ページ。
[5] 平沢 1965：17 ページ。
[6] 正木登喜子「サリドマイド奇形児の子に詫びる」『婦人倶楽部』44―2、1963―02：238―240 ページ。
[7] 川俣 2010：29〜35 ページ。

睡眠薬脅威」であった[8]。

1958 年から 1962 年の間に日本では 309 名[9]の「サリドマイド奇形児」が生まれた。公益財団法人いしずえによると、そのうち 246 名は主に手に障害があり、82 名は主に聴覚に障害があった、さらに重複している者は 19 名であった[10]。サリドマイド児の家族は、1963 年 6 月の名古屋地裁への提訴をはじめ、東京、岐阜、京都、大阪、岡山、広島、福岡地裁で大日本製薬や厚生省に対して訴訟を起こし、1974 年 10 月に和解が成立した[11]。

アニタ・バーンスタインも述べているように、サリドマイド事件は非常に大きな政治的・社会的変化をもたらし、サリドマイドは新しいシニフィアンともなった[12]。日本についていえば、日本は医療・福祉サービスの充実につながり、障害者の社会参加に影響を与えた[13]。この事件は新しい手術技術、医療技術につながり、電動義手開発の直接のきっかけともなった[14]。また、これは数十カ国で起きた事件であったため、家族、医者、法律家などの国際的連帯が成立し、フィンランドの外科医マッチ・スラマー博士(1910〜1988)の来日[15]、荒井良とその息子貴の北欧訪問[16]、飯田進のドイツ訪問[17]などはその一環であった。また、欧米ではサリドマイド事件が人工妊娠中絶の容認につながった[18]が、日本では、逆に、「サリドマイド人体実験」をきっかけに中絶を規制する試みがなされた[19]。さらに、この事件は兵庫県の「不幸な子どもの生まれない運動」のよう

---

[8] 読売新聞、1962 年 8 月 28 日「日本にも睡眠薬脅威　奇形児七例のうち五人の母親が服用」。

[9] ただし、これは生存者の数のみである。日本を含む世界各国ではサリドマイド児が死産扱いされたり、嬰児殺しの被害に合っていたと考えられる。

[10] 公益財団法人いしずえサリドマイド福祉センター　http://ishizue-twc.or.jp/thalidomide/damage-01/　（2021 年 8 月 27 日アクセス）

[11] 全国サリドマイド訴訟統一原告団・サリドマイド訴訟弁護団編（第一編）1976、561〜571 ページ。

[12] Anita Bernstein. 1997. “Formed by Thalidomide: Mass Torts as a False Cure for Toxic Exposure”. In *Columbia Law Review* 97-7: 2153-2176.

[13] 川俣 2010：442 ページ。

[14] 大塚彰「わが国における電動義手の開発のあゆみ」『人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌』15（1)、2015：1〜13 ページ。
https://core.ac.uk/download/pdf/35150721.pdf　（2021 年 8 月 25 日アクセス）

[15] 朝日新聞、1963 年 4 月 26 日「サリドマイド禍を救おう　愛の手術　二つの番組」(手術のためフィンランドから来日したスラマー博士/　タカシちゃん頑張って)、読売新聞、1963 年 4 月 22 日「“サリドマイド・ベビー”に愛の手　スラマー博士囲む座談会」。

[16] 荒井良『タカシよ　手をつなごう』文芸春秋新社、1965：145〜179 ページ。

[17] 飯田 2003：60〜68 ページ；朝日新聞、1964 年 7 月 1 日「親たちが”国際協力”：飯田さん西独へ出発」。

[18] サリドマイドを服用した妊婦の中絶を日本の新聞などはしばしば「愛の中絶」と呼んでいた。例えばアメリカ人妊婦のスウェーデンでの中絶に関する朝日新聞の記事（1962 年 8 月 23 日）のタイトルは「やはり奇形児だった　スウェーデンで「愛の手術」　米国人、念願かなう」であった。

[19] 朝日新聞、1963 年 7 月 30 日「サリドマイド人体実験　優生保護法再検討の声」。太田典礼

な優生政策の強化につながったと言えよう[20]。

サリドマイド事件をめぐる言説、サリドマイド児の「イメージ」

読売新聞の 1962 年 8 月のスクープ後、日本の新聞、週刊誌などの媒体はサリドマイド問題を積極的に取り上げるようになった。特に週刊誌にはセンセーショナルな内容の記事が多く、「奇形児」の存在の否定、安楽死の可能性まで議論されていた。同時に、新聞、テレビなどはサリドマイド児を可視化することにより障害者の様々な問題に光を当て、サリドマイド児のポジティブなイメージも作り上げたと言えよう。

読売新聞のスクープ一ヶ月後に『週刊現代』は「世界的な恐怖」「奇形児が生まれるという悲劇の周辺」などのキャッチフレーズを使った記事を掲載する[21]。サリドマイド児やその親の目を引く写真も載せ、「奇形児誕生の世界的な恐怖は、なお、いろいろな波紋をひろげているようである」と述べつつ、具体的なケースを紹介している。

> 父親は看護婦が手をかすのを断りつづけ、生まれた赤ん坊には、自分一人でミルクを飲ませていた。……父親は、その赤ん坊を母親にも見せなかった。肛門閉鎖（尻の穴が貫通していない症状）という病気をもっていたのですぐ外科手術をしなければならなかったのだが、それも承知しなかった。……そのかいもなく、赤ん坊の生命は一週間も持たなかった。原因は飢餓死。

父親が赤ん坊を飢餓させたことについてコメントをせず、筆者は「赤ん坊には、校門閉鎖のほかに、更に大きな欠陥があった。あざらし状（短肢症）奇形児で、両手両足が途中からなくなっていたのだ」のように続けている。

同じ『週刊現代』は 1963 年 1 月にサリドマイド児の父親中迫茂樹の写真付きの記事を掲載する[22]。中迫は「私はサリドマイド奇形児の親です」と名乗り出て、「奇形児」誕生のショック、手を整形で直せないショックなどについて語り、「現在サリドマイドを飲んで妊娠中の母親たちに、堕胎することをすすめたい」と訴える。ちなみに、中迫はのちに妊娠中の妻にサリドマイドを飲ませ、中絶させたという男、すなわち「サリドマイド人体実験」の当事者であった。

『性の権利：堕胎解放の歴史』三一書房、1970：16 ページ。

「サリドマイド人体実験」とは、サリドマイド児の父親が、奇形と薬の関係を立証するために、妻の次の妊娠にサリドマイドを大量に飲ませ、5 ヶ月のとき中絶させた事件であった。胎児には奇形がなかった。

[20] 土屋敦「『不幸な子どもの生まれない運動』と羊水検査の歴史的受容過程」『生命倫理』17-1、2007 年 9 月、190〜197 ページ。

[21] 武藤直大「睡眠薬サリドマイドへの疑惑：奇形児が生まれるという悲劇の周辺」『週刊サンケイ』11（43）（580）、1962―09：28―31 ページ。

[22] 中迫茂樹「サリドマイド奇形児の父として：短い手に泣くこの声を」『週刊現代』5（2）、1963―01：14―17 ページ。

『週刊現代』や『婦人倶楽部』がその後も似たような内容の記事を掲載し[23]、親の「悲劇」などを強く訴える。これらの記事は製薬会社の過失よりも障害児の「奇形」に焦点を当て、その存在自体を否定する内容となっていたと言えよう。しかし、最も過激な内容は、当時一橋大学教授、法律家、のちに（1986〜96）日本尊厳死協会会長の植松正の「サリドマイド奇形児の殺害」という記事だったと言えよう[24]。植松はまずサリドマイド児の写真を見た妻や薬大の女子学生の、「自分があんなの産んだのだったら、殺しちゃうでしょうね」という反応について語った上で、ベルギーのサリドマイド児殺害事件について紹介し、次のように述べている。

> サリドマイド奇形児の殺害に陪審は無罪の答申をしたし、民衆はこれを是認した。それは、そのような著しい奇形を持った人間の生育することが、本人にとって、かえって不幸であることを認めたからであろう。これは非常に重大なことだと思う。僕もこの結論を支持する。生き長らえることだけが幸福なのではない。この者に死を与えることが、不幸を最小限にとどめるという場合のあることを認めたのが、この裁判の帰結である。[25]

上記のような無分別な記事は少なくなかったが、他方で一部の媒体は事件自体を批判しつつ、サリドマイド児の努力や「美談」などをとりあげ、サリドマイド児を可視化し、（場合によっては「感動ポルノ」に近い）ポジティブなイメージを形成していたと言える。

朝日新聞は 1963 年 3 月に飯田進とその息子伸一の笑顔の写真を掲載し、飯田の「父母会」結成の呼びかけについて報道している[26]。また、同じ朝日新聞が伝えているように、1963 年 3 月 24 日に NET テレビは 30 分のヒューマン・ドキュメント「この子をしあわせに」にて飯田進の息子、当時 2 歳の伸一の生活ぶりを紹介している。写真には伸一と羽仁進監督が写り、「飯田伸一ちゃんはカメラや機械が大好きという」という説明文がついている[27]。朝日新聞と読売新聞は、笑顔の荒井貴の写真を掲載し、荒井家族の北欧訪問について伝えている[28]。両新聞はまた辻典子の小学校入学[29]、吉森こずえの短大入学、山本一裕の大学入学、辻典子の公務員試験合格、辻典子と

---

[23] たとえば、「『夫が憎い！男が憎い！』:離婚したサリドマイド児の二人の母の場合」『週刊現代』7（30）、1965―07：98―102 ページ、森田博恵「夫に離別されたサリドマイド児の母の歎き：不具の子ゆえに私から去った夫」『婦人倶楽部』46（14）、1965―10：224―226 ページ。

[24] 植松正「サリドマイド奇形児の殺害」『時の法令』444、1962―12：34―37 ページ。

[25] 植松 1962：37 ページ。

[26] 朝日新聞、1963 年 3 月 2 日「奇形の子にも光を　親たちが手を結んで」。

[27] 朝日新聞、1963 年 3 月 24 日「『ひとりじゃない』　この子をしあわせに」。

[28] 朝日新聞、1964 年 7 月 7 日「貴ちゃん、元気に帰国」、1964 年 7 月 12 日「再びスラマー教授頼って　サリドマイド禍の親子の記録」、読売新聞、1964 年 7 月 6 日「再手術にヘルシンキへ来て　荒井貴ちゃんの母和子さんのたより」。

[29] 読売新聞、1968 年 4 月 10 日「がんばれ典子さん　熊本のサリドマイド児ニコニコ入学」、朝日新聞、1968 年 3 月 17 日「よかったネ典子ちゃん　晴れて小学校へ」。

吉森こずえの運転免許取得[30]などをポジティブ（あるいは「美談」として）に報道している。このような記事はサリドマイド事件当事者やその努力に注目を浴び、場合によっては読者を「感動」させていたと言えよう。1980 年 2 月に読売新聞の読者は感想文を寄せ、「最近ややもすればダメ人間が多いなかで、両腕のない不自由さを克服して、すべて両足を腕にかえ、裁縫から編物、手芸や珠算、水泳までがんばりぬいたこの努力と真剣さは、ぜひ見習いたいものである」[31]と書いている。写真集『こどもの告発』[32]、映画『典子は、今』（1981）[33]などもサリドマイド児の努力に焦点を当て、「頑張る障害者」「感動させる障害者」というイメージを形成していたと言えよう。

サリドマイド児の親

サリドマイド児の親は手などに「奇形」がある子どもの誕生を「悲劇」としてみなし、そのような子どもを産んだ自分を責め、子どもを「不幸」と呼んでいた。障害者を「不幸」とみなすのは、障害者運動以前の日本では一般的であり、兵庫県の「不幸な子どもの生まれない運動」もそれを示している [34]。しかし、サリドマイド児の親は「普通」の障害児の親と相違点も多かった。彼らの子どもの障害は「作られた」障害であり、彼らはサリドマイドという薬に（障害児を産んだという）スティグマから脱出する「救い」を求めていたとも言える。

たとえば、自分の母親に子どもの障害について伝えられた梅崎幸子は次のように語っている。

> 「文子は生まれつき不幸を背負った子供なのよ。あなたもしっかり生きて、あの子の
> 不幸を幾分かでも軽くして上げなければいけないわよ」
> 私は耳を疑った。「手がねえ、何と言ったらいいのかしら……不幸なのよ」……
> 文子、そんなふうに生んでしまったママを許してね
> 翌日、病院へ一人で出かけ、新生児室に忍びこみ、急いで文子のベビー服を脱がせて

---

[30] 朝日新聞、1980 年 2 月 15 日「やったわ短大パス　こずえさん『福祉勉強したい』」、朝日新聞、1980 年 3 月 14 日「サリドマイド児・山本君　障害越え大学に」、朝日新聞 1982 年 7 月 10 日「典子は今　仮免よ」、読売新聞、1980 年 2 月 12 日「典子さん、希望の春　がんばって！晴れて市職員」その他。

[31] 読売新聞、1980 年 2 月 16 日「辻典子さんの努力　心から敬意と祝福」。

[32] 中森黎悟編・田村茂撮影『こどもの告発：サリドマイド児は生きる』サリドマイド被害児救済会、1967

[33] 典子は映画撮影について次のように語っている。「松山〔善三〕監督は一年前、テレビのニュースでわたくしの公務員合格を知ったそうです。そのときに、足が手のように動く姿を見て、『健常者である自分が勇気づけられた』と話されました。さらに『この世の中には障害を持って悩み苦しんでいる人がたくさんいます。あなたを見て少しでも元気を出してもらえるような映画を作りたい』と熱い胸の内を明かされたのです」。白井のり子『典子 44 歳：今、伝えたい』光文社、2006：81 ページ。

[34] 森岡正博『生命学に何ができるか：脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房、2001：288―302 ページも参照。

見た。手はあった。指もちゃんと五本あった。しかし、これが人間の手だろうか！？いまだかつて見たことも聞いたこともない手の形である。手首のところが、コンニャクのようにやさしくやわらかく、それでいて信じられない角度で曲がっている。……いかな罪を犯し報いが、罪なき幼な子に一生の烙印をおしたのか。[35]

鳩飼きよ子も、ショックと劣等感について語っている。

子ども誕生以来十年になりますが、私は心から笑ったことがありません。どんなに面白いことがあっても、私は心から笑いころげたことがありません。
三十すぎて初めて子どもを得た夫に、人に見せられないような奇形児しか産んであげられなかった女が、たとえどのようなことにせよ、面白がって笑い転げるなど、不謹慎に思われるのです。それに身に代えてもいとしく思うわが子が、その長い生涯のうち何度、自分の不具に涙を落とすかもしれないのに、その元凶である私が何がおかしくて笑えましょう。
私は、死ぬまで償いきれない負目を夫と子どもに負ってしまった、と思います。……そしてもう一つ、子どもさえ人並みにちゃんと産めなかったという劣等感[36]。

上のような言説が、文章を残したほぼ全ての親に見られるが、最も代表的なのは荒井良だっただろう。荒井良はマッチ・スラマー博士に息子貴の手術をしてもらい、二度目の手術のためにフィンランドに渡り、必死に息子の手を「直そう」とする父親であった。荒井は『タカシよ　手をつなごう』の中で障害児が生まれたときのショック、息子の手を「直そう」とする無数の試み、原因の追求、北欧訪問などについて述べているが、本書で最も目を引くのが、「不幸」という言葉の多用である。荒井は 63 回も「不幸」を使っている。「貴は確かにお前の子だ。フォコメリアという世にも不幸な病いを背負っている」、「…世の中には不幸な子が意外なほど多いことを知った」、「われわれ不幸な児の親たちのまとめ役のような存在になっている」[37]などである。

一方で、上述のように、親たちはサリドマイドに救いを求めていたと言える。「障害児を産む」ということは親の遺伝子または血筋の問題だと捉えられがちな時代には、子どもの障害の原因が薬だということは、そのようなスティグマからの逃げ道だったのかもしれない。

鳩飼きよ子は次のように述べている。

私が生来の私を取りもどし、人前でも声を出して笑うようになったのは、私たちが裁判を起こしたとき、学者や医師では数少なかった支援者のお一人、帝京大学の小児科医で遺伝学者である木田盈四郎教授に「子供の異常はあなたの責任ではありません。

---

[35] 平沢正夫編『ママ、テレビを消して：サリドマイド母と子の記録』小学館、1971：52〜53 ページ。

[36] 平沢編、1971：127 ページ。

[37] 荒井 1965：50、53、62 ページ。

自分を責めないでよろしい」とはっきりと言っていただいたときからである。[38]

サリドマイド裁判の資料でも、それは明記されている。「サリドマイド児をかかえた両親が、一〇年前この訴訟に踏み切った当初最大の動機の一つは……、被害児の障害が血筋や遺伝のためでなく、サリドマイドによる外因性の先天性障害であることを明らかにすることであった」[39]。

飯田進は著書『青い鳥はいなかった』の中で、サリドマイド症候群の子どもをもった親の場合は、障害をもたらした因果関係を問いただし、糾弾する相手がいた。だからほかの障害児の親たちから、『障害児貴族』と揶揄されもした」[40]と指摘しつつ、以下のように述べている。

原告側証人として出廷した機会に、レンツ博士などによるサリドマイド児の診断・判定が行われたことも既に述べた。だがその判定作業は、そこから漏れた障害児の親たちに深刻な打撃をあたえた。……だが、多くの親たちにとって、それだけの知識がなかったのは不思議ではない。そして彼らはサリドマイド禍であることに、一種の救いを求めていたのであった。わが子に障害をもたらした原因が、薬のせいだと確認できることは、だから救いなのであった。原告たちが裁判を起こした理由の最も大きなものは、そこにあった。
判定から洩れた親たちは、泣いて会場から帰った。非情な結果ではあった。[41]

おわりに

以上、サリドマイド事件およびサリドマイド児をめぐる言説について紹介した。サリドマイド児は不幸だったのか。サリドマイド事件は誰の傷だったのか。1971 年にサリドマイド裁判を傍聴した高校生は次のように述べている。

北村　本で読んだり写真でみていたが、やっぱりショックだった。
吉田　ぼくはショックを感じなかった。こどもたちが明るかったからかな。[42]

新聞などに掲載されている写真でも子どもたちは明るく笑っている。また、子どもたちの文章をみると、彼らを「不幸」にしていたのは、障害よりも、周りの目やバリアの方ではなかったかと考えさせられる[43]。大人になったサリドマイド児の生涯はさまざまであった。辻（白井）典子

---

[38] 鳩飼 2001：37 ページ。
[39] 全国サリドマイド訴訟統一原告団・サリドマイド訴訟弁護団編『サリドマイド 裁判＜第一編＞総括』サリドマイド裁判記録刊行委員会 総合図書、1976：14 ページ。
[40] 飯田 2003：14 ページ。
[41] 飯田 2003：233〜234 ページ。
[42] 読売新聞、1971 年 2 月 19 日「高校生も見たサリドマイド裁判　みんな明るい子なのに」。
[43] 子どもの声を紹介している朝日新聞の記事「強く生き抜く人間に　サリドマイド被害児は発言する」（1974 年 10 月 14 日）が示唆的である。東京の N 君（当時 12 歳）は「金より住みよい

のように、家族を作り、仕事を続けた者もいれば、自殺をした、あるいは飯田伸一のように「緩慢な死」を選んだ者もいた。サリドマイド事件から私たちは何が学べるのか。公害あるいは薬害による障害についてどのように語ればいいのか。検討すべき課題がいまだ多く残っている。

町」を希望し、「世間の施設をボクらでも使えるようにしてほしい。駅の切符の販売機だってさ、高いところにあるでしょ。ボクなんか手が短いから届かないし……」と訴える。大阪市の寺坂信子（14 歳）は「私、電車に乗るのすかん。私の左手をジロジロ見る大人がいるから。……あの大人たち、自分の子の手が悪かったら、あんな目で見るかしら」と大人の目が嫌いと訴える。平沢編、1971 においても子どもの声が紹介されている。